

今週の為替相場見通し(2022年10月24日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		145.50 ~ 151.94	147.79	144.50 ~ 153.90
ユーロ	(ドル)		0.9705 ~ 0.9875	0.9863	0.9500 ~ 0.9950
(1ユーロ=)	(円)		144.17 ~ 148.38	145.49	144.00 ~ 149.00
英ポンド	(ドル)		1.1060 ~ 1.1440	1.1310	1.1100 ~ 1.1350
(1英ポンド=)	(円)	*	164.98 ~ 170.09	166.85	166.00 ~ 169.50
豪ドル	(ドル)		0.6208 ~ 0.6395	0.6395	0.6200 ~ 0.6450
(1豪ドル=)	(円)	*	92.08 ~ 95.74	94.19	93.00 ~ 96.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 小林 元子

(1)今週の予想レンジ: 144.50 ~ 153.90 円

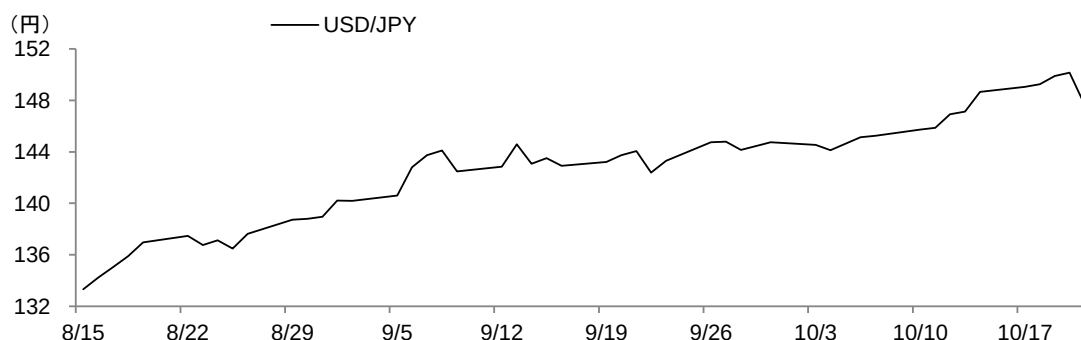
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円は心理的な節目となる150円を突破した。週初17日、148.65円付近でオープンしたドル/円はじりじりと上昇。米10月NY連銀製造業景気指数が市場予想を下回りドル売りが強まったが、日銀による円買い介入が警戒される中、米株の大幅上昇が支援材料となり149円台を突破した。18日、ドル/円は前日の流れが継続し、149円手前で揉み合う展開。海外時間では円買い介入警戒感が高まる中で一気に148.13円まで1円超の急落も、売り一巡後は再び149円台まで上伸。米金利が上昇するに動きドル/円は前日の高値を更新した。19日、ドル/円は前日の高値圏で底堅く推移。東京時間では、英9月CPIが市場予想を上回ったことで英国内のインフレの高止まりが景況感の悪化を招くとの見方が強まり、英ポンドが対ドルで売られ、ドル/円は連れ高となり上昇。海外時間でも米金利上昇にサポートされ、149円台後半まで続伸した。20日、ドル/円は前日に続いてドル買いが優勢。日銀の介入が意識されながらもFRB関係者のタカ派的な発言や米長期金利上昇によってついに150円を突破し、一時150.29円まで上昇し年初来高値を塗り替えた。週末21日、ドル/円は150円台前半でスタートし、円買い介入への警戒感依然強いものの、米金利上昇を眺めながらじりじりと上昇。海外時間には米長期金利が4.3%台まで上昇するとともに前日の年初来高値を151.94円まで更新。しかし、一部報道からFRBが利上げペースを鈍化させる可能性が示唆されると米金利は低下に転じ、ドル/円も151円台前半まで反落。その後、円買い介入の噂が広まる中、週安値の145.50円まで急落し、147.79円越週した。

今週のドル/円は底堅い展開を予想する。基本的には日米の金融政策の方向性の違いを背景にドル買いの展開が想定される。10/27(木)に米7~9月期GDPが発表される予定となっており、予想対比強い数値となった場合は一段と米利上げへのサポート材料となる。また、10/27~28の日程で日銀金融政策決定会合の開催が予定されており、現行の緩和政策維持が見込まれており、こちらもドル/円の上昇材料となる。一方で、歴史的な円安進行に対し日本当局による介入への警戒感是一段と強まっており、上値迫いには引き続き神経質な展開が続くと想定される。重要指標の発表は24日(月)に米10月製造業/サービス業PMI、25日(火)米10月コンファレンスボード消費者信頼感、26日(水)米9月新築住宅販売件数、27日(木)米7~9月期GDP、個人消費、27日(木)~28日(金)の日程で日銀金融政策決定会合、28日(金)米9月個人所得/支出、PCEコアデフレーター、米10月ミシガン大学消費者マインドなどの発表が予定されている。

(3)先週までの相場の推移

先週(10/17~10/21)の値動き: 安値 145.50 円 高値 151.94 円 終値 147.79 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第一チーム 西 拓也

(1) 今週の予想レンジ: 0.9500 ~ 0.9950 144.00 ~ 149.00 円

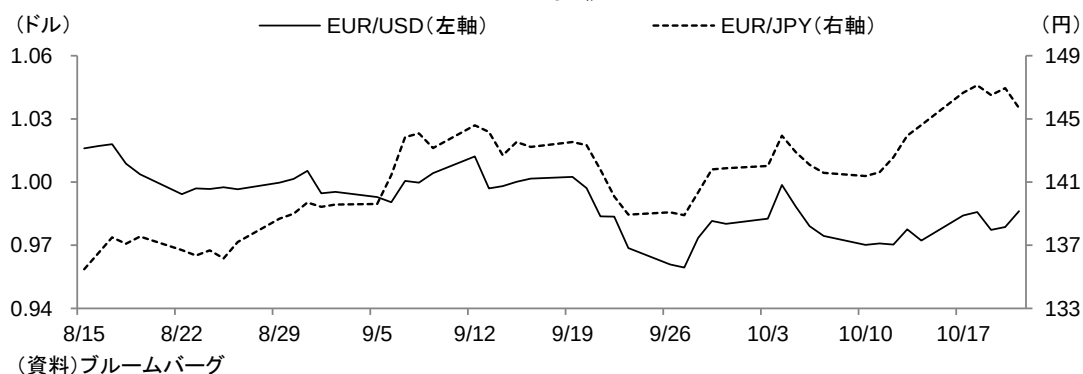
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は方向感に欠ける展開。週初17日、0.9740でオープンしたユーロ/ドルは欧州株の堅調推移を受けたリスク選好のドル売りや米経済指標の冴えない結果にさらに0.98台半ばまで急伸。18日、ユーロ/ドルは0.98台半ばを中心とした揉み合いの展開。英ポンドの下落にユーロ/ドルも連れ安となり一時、0.98台前半まで下落も、その後は独10月ZEW景気期待指数の市場予想を上回る結果に一時週高値の0.9875まで反発。19日、0.98台後半で堅調に推移していたユーロ/ドルは米金利上昇や欧州株の軟調推移にドル買い優勢となり、0.97台半ばまで急落。その後反発も戻りは鈍く上値の重い展開となった。20日、ユーロ/ドルは株式市場の持ち直しやトラス英首相の辞任表明を受けた英ポンドの上昇にユーロ/ドルは連れ高となり0.98台半ばまで急伸も、その後は米金利上昇に伴うドル買いに0.97台後半まで反落。21日、米長期金利が4.3%台に上昇する流れに151.94円までドル/円が買われユーロ/ドルは0.97台前半まで下落するも、その後、日銀による為替介入が行われたとみられる。ドル/円が約6円急落する中でユーロ/ドルは0.98台半ばまで上昇。0.9863で越週した。

今週のユーロ/ドル相場は軟調推移を予想。先週は市場に混乱を招いた英政府の政策修正やトラス英首相の辞任表明などを背景に復調したポンドに連れ高となる場面もあったが、米長期金利上昇の流れでドル買い優勢。日銀の為替介入によるドル売り円買いもあったが、ユーロの上値は概ね限定的だった。今週は27日(木)のECB政策理事会に注目が集まる。今回は+75bp利上げが予想されているが、ラガルドECB総裁から今後の利上げペースについてどのような説明があるか、国債の保有額を減らす量的引き締め(QT)についても言及があるか注目したい。なお、前回9月会合の議事要旨では、ユーロ安を通じたインフレ高進に言及したほか、経済成長が懸念されたとしても積極的な利上げが必要との見解が示されている。力強い米国経済とは裏腹に、ウクライナ問題の泥沼化、EU各国で足並みが揃わないエネルギー政策、トラス英首相の後任選出など、ユーロ圏を取り巻く経済環境は依然不透明感が拭えない状況が続く。今週は、24日(木)にユーロ圏10月PMI、25日(火)に独10月IFO企業景況感指数、27日(木)にECB政策理事会、28日(金)に独7~9月GDP、独10月CPIの発表が予定されている。経済指標の結果が景気減速を意識させる内容となれば、ユーロの上値は重く推移するだろう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(10/17~10/21)の値動き: (対ドル) 安値 0.9705 高値 0.9875 終値 0.9863
(対円) 安値 144.17 高値 148.38 終値 145.49



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.1100 ~ 1.1350 166.00 ~ 169.50 円

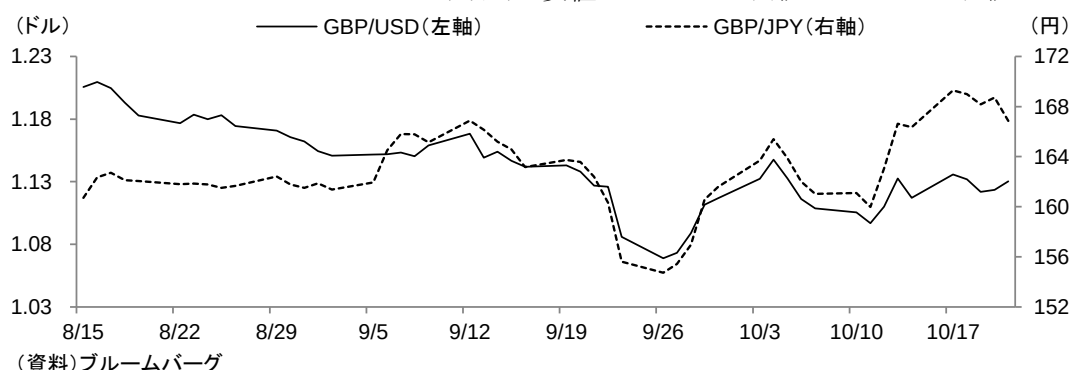
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、週明け17日に全面高が先行したものの、同日中に頭打ち、その後は軟調推移を支配的とした。ただし、並行した円の軟調を反映し、対円では、軟調気味なものの、週を通して概ね横ばいと言える推移を続け、週明け直前に不自然に急落した。週明け直後のポンド全面高は、週末を挟んで膨らんだ英財政健全化期待を追い風に進んだ。更迭されたクワング財務相の跡を継いだハント財務相は、14日、早速、法人税率引き上げ撤回の撤回を発表していた。週明けには所得税率引き下げなど、前財務相が提示した財政拡張策の概ねが撤回されることが期待された。実際、17日中にハント財務相は、所得税率引き下げ撤回の他、燃料補助金支給を来年4月までで一旦打ち切るなど、一連の財政拡張策のほとんどを撤回した。ただし、こうした善後策を、本来、最も好感すべき英長期国債の値動きは鈍く、17日には前週末の下落分を穴埋めした程度で、必ずしも上昇と言える値動きは見せなかった。ポンドの反応も同様で、ハント財務相が一連の発表を済ますと、前後して頭打ち、その後週を通して軟調推移を支配的とすることになった。英時間の19日夜には、ブレーバマン英内相が更迭されたが、実態は、トラス首相との政策上の対立で辞任したに等しいと見做された。僅か6日間の間に主要閣僚2人を失ったトラス首相には「政権の維持は不可能」との思惑が与党保守党の内外で強まり、翌20日、実際にトラス首相は辞任。皮肉なことに、首相辞任は一時的なポンド反発を誘ったが、そのポンド高も長続きはせず。21日の欧州時間には、米長期金利上昇を背景としたドル全面高が進み、発表された英9月小売売上高の大幅下振れも相まってポンドは週の安値まで下押し。その後は、上述対円での急落から、急反発を経て週の取引を終えた。

今週の英ポンド相場は、上値の重い軟調を予想。財務相更迭、首相退陣で英財政政策の迷走が、少なくとも一旦、収束したことは肯定的に受け止めることもできる。しかし、英長期国債の値動きも、ポンドの値動きも、9月23日の英補正予算発表(全ての混乱の出発点)前の水準をぎりぎり回復したか、しないかに過ぎない。新政権の真価が問われるのは今後のはずだが、肝腎の新政権が、まだ、存在しない。与党保守党は遅くとも28日(金)までに、早ければ24日(月)にも新党首(=新首相)を選任するはずだが、電子投票でも数日を要する議員投票を回避できるか否かは、現時点でまだ不透明。新首相が誰になるにせよ、ハント財務相は、新内閣発足後も財務相にとどまることが見込まれており、それは好意的に評価できそうだが、いずれにせよ政治的空白は短い方が、ポンド市場でも、英国債市場でも好感されるのではないかと。ただし、スナク元財務相、モーダント元国防相に加え、ジョンソン元首相の名前も有力後継候補に挙がっているのは気掛かり。「選挙で勝った(=勝るのではないはずだが)指導者」ということで保守党議員・党员の間では今でも大きな人気を誇る同元首相だが、今夏の政治的空白を作り、その後の混乱を招いたのも、元はと言えば、自ら作成したコロナ禍下での行動規制を自ら破ってしらばつくれた嘘つきの同元首相が元凶。一般有権者だけでなく、金融市場も、その復活を歓迎しないのではなかろうか。消去法的に、財政政策運営の実績があるスナク元財務相が、速やかに選出されることが、ポンドにとっては考えられる最善のシナリオとなるように思われる。英中銀金融政策に関しては、年内の+75bp利上げ×2回が完全に織り込み済みの状態だが、先週発表された英9月小売売上高の大幅下振れなどを受け、目先の利上げ期待は若干緩んでいるのが現状。言い方を変えれば、英中銀の11月金融政策委員会では+75bp以外の選択肢は考え難くなっている状況で、英中銀金融政策がポンド動向に大きく影響する展開は、目先考え難いのではないかと。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(10/17~10/21)の値動き: (対ドル) 安値 1.1060 高値 1.1440 終値 1.1310
(対円) 安値 164.98 高値 170.09 終値 166.85



4. 豪ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 上野 智久

(1) 今週の予想レンジ: 0.6200 ~ 0.6450 93.00 ~ 96.50 円

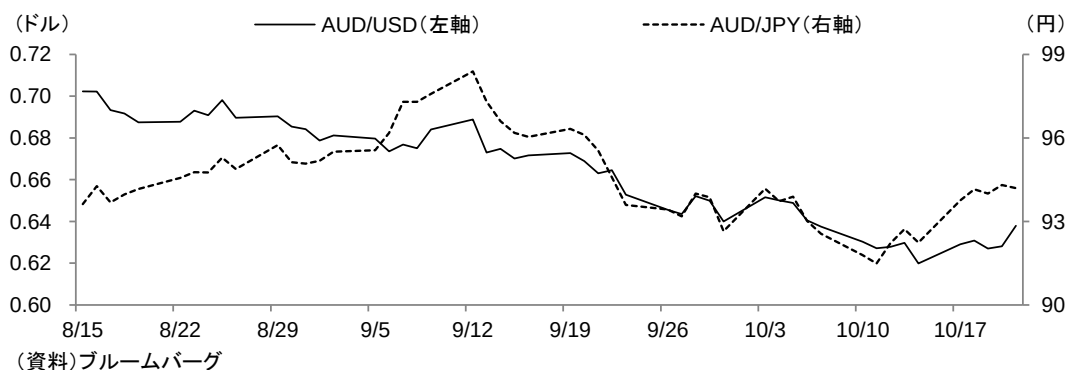
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は小幅に上昇する展開となった。週初17日の豪ドルは0.6220近辺で取引開始後、英国の減税計画撤回による消費者心理の改善などを背景に株価上昇、豪ドルは買いが優勢となった。終日を通してじりじりと上値を迫る展開となり一時0.63台前半まで上昇。18日、バロックRBA総裁補による講演やRBA議事要旨などの材料もあったが特筆すべき材料も出てこない中で終日方向感に欠く値動きが続いた株価に連動する形で、豪ドルも0.63ちょうどを挟んだもみ合いが続いた。19日、豪ドルは0.62台後半まで下落。序盤は堅調な株価を背景に豪ドルは小高く推移。米株の反落や米20年国債入札が不調だったこと等から米10年債が一時2008年以来の水準となる中で、豪ドルは0.62台半ばまで下落した。20日、豪州序盤に発表された豪9月雇用統計では新規雇用者数が予想を下回ったことを受けて豪ドルは売りで反応。一旦0.6229まで下落した後は、堅調な株価に支えられ上昇に反転。トラス英首相辞任のヘッドラインを受けて英ポンドが大きく上昇すると、豪ドルも上値を迫る展開となり一時0.6356まで上昇。その後、フィラデルフィア連銀ハーカー総裁が「政策金利を年内に4%を大きく上回る水準まで引き上げ、景気抑制的な水準で維持する可能性が高い」と発言したことが伝わると、米金利が上昇し、株価は下落。豪ドルは0.6280近辺まで大きく売られて引けた。21日、本邦による円買い介入との報道が見られる中で、ドル売りが強まり0.6393まで上昇した。また、一部の米金融当局者が金融政策の引き締め過ぎを懸念しているとの報道で米債利回りの上昇が抑えられ、米株が反発した事も豪ドル高の地合いをサポート。結局0.6395で越週している。

今週の豪ドルは上値の重い展開を予想する。先週の豪ドル相場は引続き米金利の動向、英国政治動向、本邦による為替介入報道などに浮沈する主体性の乏しい展開となっている。21日に続き、24日早朝においても介入観測が高まっているが、為替市場における影響は一時的になる可能性が高く、また米金利が明確に低下する局面を期待しにくい中で、豪ドルは上値を切り下げるような展開となる蓋然性が高いのでは。今週は26日(水)豪7~9月期CPIや28日(金)豪7~9月期PPIの発表が予定されている。前回のRBAにおいて、+25bp利上げと+50bp利上げを支持するメンバーが拮抗していたことが、今後の経済を巡る不透明感や、利上げが实体经济に影響を及ぼすまで時差があること等を理由に+25bp利上げが決定されている。今後の豪金融政策運営を占ううえでも、それらの結果には注目したい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(10/17~10/21)の値動き: (対ドル) 安値 0.6208 高値 0.6395 終値 0.6395
(対円) 安値 92.08 高値 95.74 終値 94.19



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。